

韓流のTVドラマは日本では中高年女性を中心に根強い多くのファンがいる。韓流ドラマの根木にあるのは「恨(ハン)」という、民族、文化的な複雑な感情、あるいは思考様式である。単純化すれば、「復讐と精神的浄化」ということになる。ほとんどの韓流ドラマは「復讐」の要素を含んでいるが、中でも姉妹の愛憎劇が強烈だ。キム・ハヌル主演の『秘密』、キム・ジスとイ・ハナの『太陽の女』、それにホン・ウニの『揺れないで』、これらは姉妹の愛憎劇三部作と言われているらしい。『揺れないで』のヒロイン、イ・スヒョソは、これまで見てきた中でもっとも凄まじいキャラクターだった。嘘をつきまくり、悪いことは全部他人のせいにして反省も後悔もしない。精神医学的には「病気」で、実際にこんな女がいたら、本人はもちろん、周囲の人生も破滅するだろうが、ドラマなので楽しめる。

基本的に復讐がある韓流ドラマの登場人物は、女性により顕著だが、相手に面と向かって、言いたいことだけではなく、言わなくてもいいことまで、全部言う。それは「言わぬが花」に代表される日本人のメンタリティとのもっとも大きな違いだ。

「**させていただきます」という表現は、決定と責任の所在を曖昧にできるために、あっという間に流布・定着した。わたしたちの社会は、決定と責任の所在をはっきりさせることを嫌う。言い換えれば「自らの意志による決定」の明言からの逃避であり、甘えが奨励されていることになる。「甘え合う」ことが善となっている社会からの、暗黙の要請と強制が働いているのである。

時間軸による幸福や充足を得られない人は、自分よりも明らかに不幸だと思える他人がいることを確認することで、カタルシスを得ようとする傾向がある。他人の不幸は蜜の味というように昔ながらのカタルシスだが、時間軸による幸福と充足が絶望的に不足している状況では、より明確に、またより強く、他人の不幸

を求めるのかも知れない。言うまでもなく、他人の不幸を求めることは、「非寛容」の最大の源泉である。

夢を持とう、夢を持ち続ければいつかは叶う、そんなことがメディアで喧伝されるようになったのはいつのころからだろうか。有名なスポーツ選手、文化人、役者やコメディアン、それに企業経営者などが、メディアに登場し、しきりに夢について語る。

「自分は小さいころから夢を持ち続け、それに向かって努力し続けて、ついに、夢は叶った。みんなもぜひ夢を持って欲しい。夢に向かってがんばればいつか現実になる」

子どもたちは、そういったコメントを聞いて、夢を持たなければならないのかと考えるようになる。一種の、「合成の誤謬」だ。もちろん、夢を抱くのは悪いことではない。だが、成功者は、夢を持ち続けたというだけで成功したわけではないし、子どもたちに、夢を抱くことを結果的に強要することには違和感がある。**夢の必要性、重要性について過剰とも思われる情報が流されるのは、実は、夢を持つのがむしろかしい社会だからだ。**社会に希望が充ちていれば、夢という言葉が多用されることはない。夢を持とうと呼びかけなくても、子どもたちは自然に将来についてポジティブに考えるようになる。

当時、つまり一九七〇年代末は、トラックドライバーにとって良い時代だった。そもそも大型免許の取得者の絶対数が少なく、業者数も今よりはるかに少なく、しかもまだ高度経済成長の余韻が残っていて仕事も多かった。大学卒の銀行員より稼げたという。だが、今は違う。運送会社は、頂点に大手が君臨し、実際にトラックを走らせているのは、ほとんどが下請け、孫請けの中小零細企業だ。運賃は叩かれるだけ叩かれる。通称「水屋」と呼ばれる、荷物と運送会社を仲介する荷物取扱業者がいて、コンピュータを使って荷物や空きトラックの情報を仕入れ、低コストを最優先に仕事を発注する。

中小零細の運送会社は無数にあって競争が非常に激しいので、取扱業者には頭が上がらないし、言い値で運ぶしかない。驚いたのは、たとえば関東から関西への長距離運送の場合、夜間便以外には高速代が出ないので、**夕方六時に出発だと、何と一般道を走るのだ**そう。途中一時間半程度の食事と仮眠休憩をとり、だいたい十二時間くらいかかって、早朝に関西の納品先に着く。帰り荷を積むために関西圏を移動して積み地に着き、また夕方から一般道を関東まで走る。

物流は、経済の血管のようなもので、とても重要だが、近い将来、トラックドライバーの**絶対数が不足するらしい**。理由ははっきりしている。給与が安く、**過酷**だからだ。東日本大震災の直後の被災地を想起するまでもなく、物流が止まれば、あつという間に生活必需物資が枯渇する。

「命令される」「指示される」「強制される」
というのが、まず最初からダメで、それらが届いた時点でモチベーションが音を立てて崩壊していくのが自分でもわかる。